

主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和 5 年度実施報告（概要）

団体名： 福島大学附属小学校

1. 類型

【類型 I ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)

2. 実践校について

実践校名	(ふくしまだいがくふぞくしょうがっこう) 福島大学附属小学校	
全校児童・生徒数	実践研究の対象	
616 人	(学年)	(児童・生徒数)
	＜ 1 年目 ＞	
	第 5 学年	103 人
	第 6 学年	101 人
	＜ 2 年目 ＞	
	第 3 学年	103 人
	第 4 学年	103 人

3. 実践校における実践内容

(1) 概要

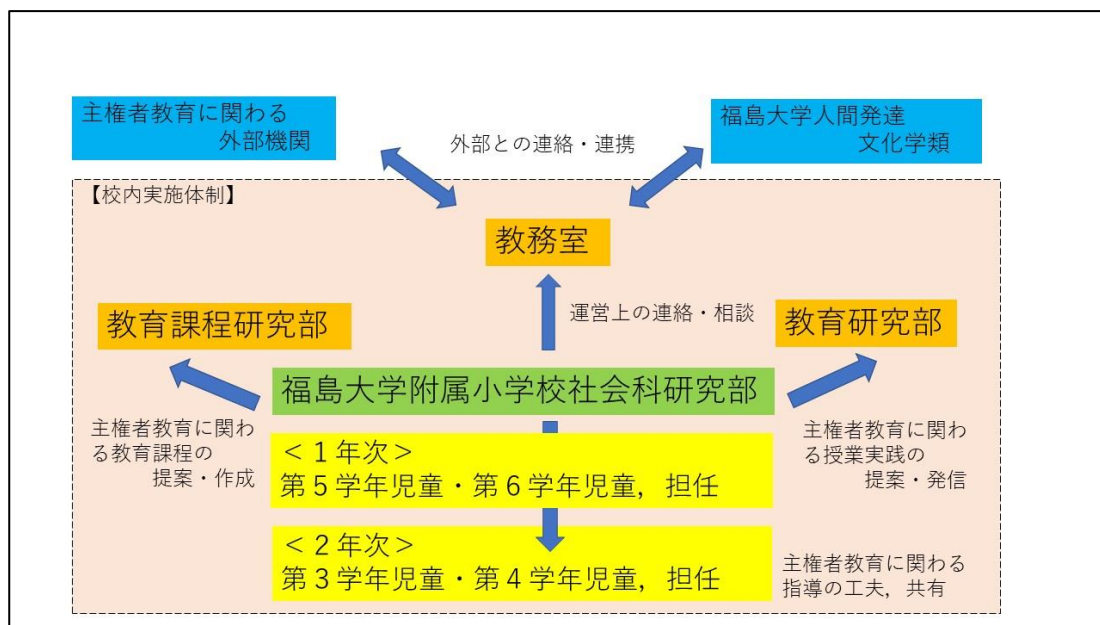
大学や主権者教育アドバイザー等の関係機関との連携体制や校内の専科体制等を組み、1 年目は高学年（第 5，6 学年）の社会科を中心に，我が国の食料生産の諸問題や，グローバル化する社会を考える学習を行う。その際，議論を授業に取り入れるとともに，校外学習や外部人材の活用を図る。2 年目には，1 年目の成果と課題を基に，中学年（第 3，4 学年）での社会科における実践や家庭科や道徳科，特別活動等での実践を行う。

(2) 1 年目(令和5年度)の実践内容

1 年目は第 6 学年，第 5 学年を対象に，①主権者意識を育成するための資質・能力の系統性を意識した授業づくり・教育課程づくり，②主権者教育を充実させるための教育体制の整備，③主権者教育を意識した校外学習や講師招聘授業の充実を図った。第 6 学年では「グローバル化する世界と日本の役割」，第 5 学年では「我が国の食料生産」の単元を扱った。授業実践では，議論を授業に取り入れ，どのような単元・授業づくりが求められるのかを探っ

た。その際、単元を通して校外学習や外部講師の活用の充実を図った。また、1年目の実践を基に社会科を中心とした教科横断的な学習の充実を図る教育課程の編成を行った。これらの工夫が主権者意識をもつことにつながったのかを検証するために、単元学習前と単元学習後に児童へアンケートを取り、児童の変容を探った。その際、大学や主権者教育アドバイザー等と連携して、授業づくりや教育課程づくりが効果的であったのかを検証した。

4. 実践校における実施体制



5. 各研究テーマについて、1年目の実践を踏まえた成果等

【類型Ⅰ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)

＜児童生徒が社会的事象に興味・関心を持ち、自分事として捉えながら、児童生徒に考えさせる教育活動を行うため、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

授業づくりでは、①自分とのつながりを意識した教材を工夫して提示すること、②外部人材を交えた議論の機会を意図的に位置付けることが挙げられる。具体的には、第6学年では、開発途上国の児童労働や貧困の問題とわたしたちの生活とのつながりが見いだせるよう、ニカラグア産のフェアトレードコーヒー豆を教材化した。また、青年海外協力隊の方を交えて議論する機会を設けた。第5学年では、単元の導入で、一杯のそばの産地について教材化を図った。普段口にする食料の多くは外国産のものであることに気付くことで、これからの食料生産を考えるきっかけをつくった。また、農林水産省の方とともに日本の食料自給率を上げる方法を議論する授業を行った。

2つの授業実践の成果として、1点目は、自分とのつながりを見いだす教材を提示することで、問題解決の切実感をもち、自分事として捉え、考えていくことにつながった。2点目は、外部人材の方を交えて議論する時間を位置付けたことで、児童の考えを価値付けてもらったり、児童が見いだしていない視点を話していただいたりする機会となり、より自分事として捉え、考えを深めることにつながった。

課題として、事後研究会で大学教授や主権者教育アドバイザーの方から「外部人材の方と議論することは効果的だが、国や地方公共団体の施策や考えを積極的に伝えてもらえるようにすることで、より政治の働きを身近に感じることにつながるのではないかな。そうすることで、社会に参画する意識がより高まるのではないかな。」という指導を受けた。

2年目においては、複数の教科等で議論を充実させるための単元構想や授業づくりを行うとともに、政治とのつながりを意識できる教科等はその点も意識していきたい。実践に当たっては、中学年を中心にを行い、系統的な指導の在り方を探っていく。

＜発達段階に応じた情報活用能力の育成(特に、社会的事象に関する情報を収集し、その情報を公正に判断し、自分の意見をもつこと)に関して、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

2つの授業実践において工夫したことは、校外学習や外部人材の活用を充実することである。学年が上がるに従って、学習の対象が広がっていく中でも、見学や外部人材の話を通して、学習できるようにした。第6学年においては、「グローバル化する世界と日本の役割」の単元において、JICA 地球ひろばへ校外学習に行くとともに、JICA 青年海外協力隊の方に単元を通して関わっていただき、学習を進めた。第5学年においては、「我が国の食料生産」の単元において、気仙沼市の魚市場に校外学習に行くとともに、庄内平野の農家や農林水産省の方とオンラインで話を聞く機会を設けた。ひと・もの・ことに直接関わることで、情報を収集し、その情報を公正に判断し、自分の意見をもつことの充実を図ることができた。

課題としては、校外学習や外部人材を活用したもの、その効果について見直す必要があり、単元の中でどのような教育効果があるのかを適正に捉え、計画的に活用する必要があった。そこで、2年目には、年度当初に社会科研究部員で、校外学習や外部講師の計画を立てるとともに、その活用が適正かどうかを十分に検討していくようにする。

2年目においては、中学年の実践となるため、1年目の高学年の実践以上に、校外学習や外部人材の活用が重要視される。外部人材の方とねらいを共有し、単元での学びを充実できるように活用していく。

＜教科等横断的な学習を充実するために、教育課程の編成に当たってどのような工夫が考えられるか。＞

第6学年、第5学年の実践から、国語科や総合的な学習の時間との関連を見いだすことができた。関連単元の実施する時期を合わせ、指導内容の精選を図ることで、教科横断的に学びを深めることができた。

一方、総務省の主権者教育アドバイザーからは、主権者の育成のためには、議論が大切であり、低学年から議論のよさを積み重ねていく必要があるとの指導を受けた。特に特別活動では、学級会において互いの意見を主張し合い、合意形成を図っていくという特性上、特別活動と社会科との関連を図ることで、議論も深まっていくとのことであった。低学年・中学年のうちからこの経験を積み重ねていくことで、社会科の授業において、立場や根拠を明確にして議論する力の素地が育まれると考えられる。

1年目において2年目に実施する教科横断のカリキュラムの作成をした。2年目は、1年目に見えてきた教科横断的な学習の充実のために整理したカリキュラムを基に実践を行い、その成果と課題を明らかにしていく。

主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和5年度実施報告（実践校における実践内容の詳細）

団体名: 福島大学附属小学校

1. 類型

【類型Ⅰ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)

2. 实践校名

福島大学附属小学校

3. 実践校における1年目（令和5年度）の実践内容

第6学年 授業実践①

単元名 「世界の未来と日本の役割」 (大単元名「世界の中の日本」)

学習指導要領上の位置付け 学習指導要領社会編 第3章 2 第6学年の内容(3)

単元内の位置付け

児童がより早い段階で、世界を視野に入れて社会的事象を捉えられるようになることが、グローバル化する国際社会に主体的に参画する意識を育む上で重要だと考え、政治に続いて、国際の学習を歴史の学習に先行する形で実施した。単元「世界の未来と日本の役割」においては、国際協力の分野で活躍してきた講師を招聘する授業を位置付けるとともに、単元の中では、国際的な視点から、これからの社会への関わり方を考える授業を実施し、児童の姿を基に主権者意識の高まりを見取るようにした。

社会科 年間カリキュラム ※ 色が付いている単元は、主催者意識育成の観点から、重点をおいて学習を進める単元													
	前期						後期						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
3年生	芽つめよう わたしたちの福島県 (14) 学校のまわり (4) ※まちたん (4) ※市役所		福島市ではたくさん人とわたしも (28) わたしたちのまちの農家さん (12) ※福島市内の農家農産		わたしたちのまちのお店屋さん (12) ※福島市内のスーパーマーケット		福島市の安全を守る人々わたしも (20) 火事からくらしを守れ! (10) ※福島市内の消防署		事故からくらしを守れ! (10) ※福島市内の警察署		福島市のうつかりまちわたしものくらし (12) 福島市のうつかりまちわたしものくらし (12) ※市役所		
4年生	芽つめよう わたしたちの福島県 (19) 芽つめよう わたしたちの福島県 (19)		健康や環境を支える人々わたしも (24) 福島市の水はどこからどこへ? (12) ※沼津上川上・浄水場		福島市をきれいなまちへ (12) ※市役所・直庁		福島県を災害から守れ! (11) 昔からあるまちわたし (10) ※市役所		福島市の安全を守る人々わたしも (20) 消防の大切さを学びたい! (13) 市役所長・消防団長・消防士と関わる (7) ※市役所		オランダとの国際交流 都市史 (8) 大規模焼失でまちづくり まちづくり (7) 防災を視覚に生かす いまのまち (7)		
5年生	芽つめよう わたしたちの日本 (20) 日本ってどんなところ? (5)		自然とくらし (15) わたしたちの食生活 (2)		日本の主食 米づくり (12) 海の幸を食せ! (8)		これからの食生活 (2)		芽つめよう 日本の工業製品 (21) これが日本の工業製品です食だ! (5) 工業革命のひみつ食だ! (5) 工業製品を食だ! (5)		情報化する日本の社会 (16) 情報を使う食だ! (5) 情報を使う食だ! (5) ※テレビ		
6年生	心のかんないかたちをくらし (18) 心のかんないかたちをくらし (18)		日本の優れた技術 (13) つながりの心 (7) 夢をかなそう (7)		心のかんないかたちをくらし (18) 心のかんないかたちをくらし (18)		心のかんないかたちをくらし (18) 心のかんないかたちをくらし (18)		わたしたちの歩み (14) 心のかんないかたちをくらし (18) 心のかんないかたちをくらし (18)		心のかんないかたちをくらし (18) 心のかんないかたちをくらし (18)		戦争をこえて未来へ (15)

指導上の工夫

○ よりよい社会を主体的に構想する人々の努力に触れる活動

青年海外協力隊として発展途上国で活躍してきた方を講師として招聘し、国際協力に関する努力について情報収集することができるようにした。また、地球規模での課題や世界の国々が抱えている課題の解決について議論したことに對し、専門的な見地からアドバイスをもらったり、価値付けてもらったりする機会を設け、国際社会に生きる日本人として、世界の国々の人々と共に生きることの大切さに対する考えを深めることができるようにした。



写真【青年海外協力隊の方の話】



写真【青年海外協力隊の方を交えた授業】

○ 学習後も見つめ続けることができる教材の工夫

ニカラグア産のフェアトレードコーヒーを事例として取り上げることで、日本にくらすわたしたちの生活とニカラグアの貧困や児童労働等の問題とのつながりを見いだすことができるようにした。その上で、青年海外協力隊の方から、容易に解決できない現状があることを話してもらうことで、さまざまな角度から、課題の解決に向けて我が国が果たすべき役割等を議論することができるようにした。また、答えの出ない難しい課題だからこそ、議論をきっかけに、将来にわたって生活の中で見つめ続けることができるようにした。



写真【フェアトレードコーヒー豆の教材化】

児童の変容

ユニセフ等の国連機関を通じての多国間支援について学習した後、ニカラグア等の途上国に対して自分にできる支援を考えた際、抽出児は下の資料のような考えをもっていた。本時ではニカラグア産のフェアトレードコーヒー豆を教材化し、ニカラグアに青年海外協力隊として派遣されていた方を交えて議論を行った。授業での資料提示やその後の議論を

通して、抽出児の考えは下の資料のように変容した。

ここからも、前時までの国連の多国間支援についての理解を基に、途上国との関わり方を議論する中で、その国の状況をしっかりと理解し、その国の将来的な利益を考えて支援の方法を決めて関わろうとしていることが分かる。議論の前後で、自分にできる関わり方自体は変わっていきなくとも、途上国にとって長期的な利益と社会の発展を考えて、自ら関わろうとする態度の変容が見られた。



写真【議論の様子】

【議論前の考え】

わたしにできることは募金をする。小さなことから始めることが大切だと思う。ユニセフなどを通じて多くの人が協力してくれれば、途上国の大きな力になると思う。

【議論後の考え】

フェアトレードに関する動画を見たときには、貧困で悩んでいる人のためにフェアトレードコーヒー豆を買おうと思った。でも資料の地図を見ると、コーヒー生産適地が減少していることが分かる。だからコーヒー豆の生産にだけ力を入れてしまうと、別の仕事や産業が発展しなくなり、コーヒー豆の生産での利益が得られなくなっていくと思う。だから他の方法で支援することが大切だと思う。コーヒー豆での利益だけでその国全体がよくなるとは限らないから、やっぱりわたしはユニセフに募金などをして、医療や教育などに使った方が、将来的に考えるとよいと思う。

資料【議論を通して見られた考えの変容】

他教科等との関連

国語科「世界に目を向けて意見文を書こう」の単元を社会科の学習の単元と並行する形で実施し、国語科において、社会科での学習や議論を基に、考えをまとめる活動を取り入れた。社会科の授業で活用した資料を引用しながら、改めて社会の発展のために、自分の関わり方を考え、読み手に発信しようとする姿が見られた。



写真【国語科で意見文をまとめる様子】

途上国の人々への支援を続けるために

六年一組

フェアトレードとは、発展途上国で作られた製品、原料などを正しい値段で買うことで生活に苦しんでいる世界中の人々を売り上げのお金で支援する取り組みのことです。私はフェアトレードにはメリットもありますがデメリットもあると考えます。そのデメリットが発展途上国の人々にとっては将来的に大きな悩みになってしまうのではないのでしょうか。

開発途上国では、フェアトレード製品のみ生産率が高い傾向があります。それを「モノカルチャー経済」と言います。その状態になると、その生産物が気候などが原因で作れなくなったり、そのものの利益が得られなくなってしまう。資料一を見ると、ニカラグアのコーヒー豆の生産適地が今後減少していくことが予想されます。おそらく、フェアトレード製品を継続的に販売していくのは難しくなると思います。

フェアトレード製品を作っている裏では、児童労働で働かされている子どももいます。資料二を見ると農林水産業だけで全体の七〇％をしめる一億七五〇万人の子どもが働いていることが分かります。フェアトレードだけを優先していくと、子どもにとって大切な教育の機会を失ってしまうことになってしまいます。

フェアトレードにはメリットもデメリットもあります。デメリットを出来るだけ減らし、開発途上国の人々のために、将来的に考えて、ユニセフ募金など、別の方法でも支援することが大切だと思います。

フェアトレードのメリットもデメリットも多くの人が理解し、開発途上国の人々が現在も未来も充分な暮らしを続けられるように、私たちが支援していかなければならないと思います。

資料一

資料二

産業	割合
農業・林業・水産業	70%
製造業	11.1%
サービス業	18.9%

資料【国語科でまとめた意見文】

その他

実践に当たって、グローバル化する国際社会に生きる児童たちが、その社会に主体的に参画する意識を育む上で重要だと考え、政治の学習に加えて、国際の学習を歴史学習に先行する形で実施した。その結果、歴史の学習「戦争をこえて現代へ（戦後）」の単元において、予想の段階や将来の発展を考える段階において、国際社会を視野に入れた上で発展を考える児童が多く目立つ傾向が見られた。戦前までの学習においては特出してこのような傾向が見られなかったものの、戦後の学習にこのような傾向が見られたのは、世界の国々との協力で成り立っているという現代社会の姿をしっかりと捉え、今後も社会を発展させる必要性を見いだしたからだと想定される。

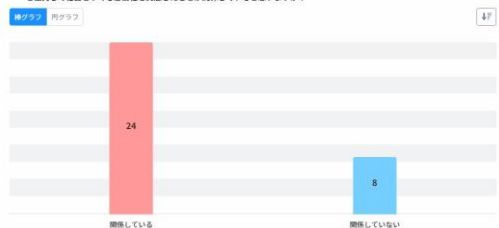


写真【友だちと将来の発展を話し合う様子】

今年度の教育課程上の単元の位置付けや内容の工夫から、次の2点が影響していると考えられる。①国や地方公共団体の政治の学習において、国際と関連する多文化共生センター設立に関する政治の働きを扱ったこと。②歴史学習に先行して国際の学習をおこなったこと。影響があったかを調べるために児童に取ったアンケート結果は右の通りである。

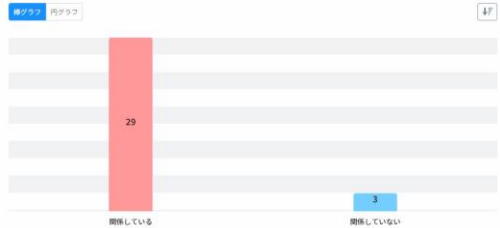
このことから、国際社会を生きる主権者として社会を発展させようとする意識の涵養には、政治の学習で国際的な内容を扱ったこと、国際の学習を先行して行ったことは、一定程度の効果が見られたと考えられる。また、児童の実感として、国際の学習を先行して行ったことの効果が高く、世界とのつながりの中で日本の現代社会の姿を捉え、これからの国際社会をより発展させていこうと考える姿につながっていったと考えられる。

【1】歴史の学習で「外国とのつながりや関わり」に関する考えが多く出た理由として、政治で「多文化共生センター」を取り上げ、外国と協力して社会をつくる必要性を実感したことが関係していると思いますか？

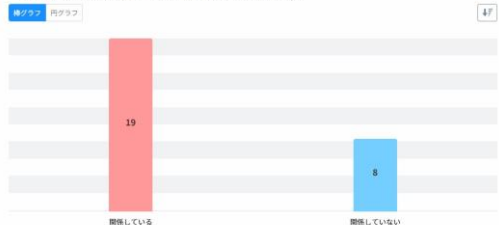


1 組

【2】歴史の学習で「外国とのつながりや関わり」に関する考えが多く出た理由として、国際の単元を先に学習して、国際協力や世界への支那の仕方を理解したことが関係していると思いますか？

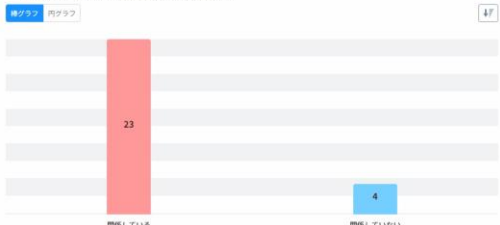


【1】歴史の学習で「外国とのつながりや関わり」に関する考えが多く出た理由として、政治で「多文化共生センター」を取り上げ、外国と協力して社会をつくる必要性を実感したことが関係していると思いますか？

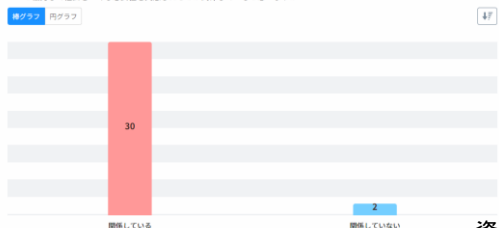


2 組

【2】歴史の学習で「外国とのつながりや関わり」に関する考えが多く出た理由として、国際の単元を先に学習して、国際協力や世界への支那の仕方を理解したことが関係していると思いますか？

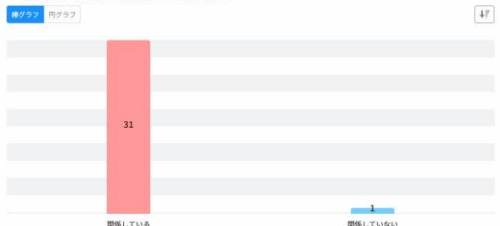


【1】歴史の学習で「外国とのつながりや関わり」に関する考えが多く出た理由として、政治で「多文化共生センター」を取り上げ、外国と協力して社会をつくる必要性を実感したことが関係していると思いますか？



3 組

【2】歴史の学習で「外国とのつながりや関わり」に関する考えが多く出た理由として、国際の単元を先に学習して、国際協力や世界への支那の仕方を理解したことが関係していると思いますか？



資料【アンケート結果】

単元名 「考えよう これからの食料生産」（大単元名「考えよう 日本の食料生産」）
 学習指導要領上の位置付け 学習指導要領社会編 第3章 2 第5学年の内容（2）

単元内の位置付け

「考えよう これからの食料生産」は、大単元「考えよう 日本の食料生産」の中の最終単元である。本単元までに、我が国の食料生産の概要や水産業、農業について学んできた。これらの学びを基に、これからの食料生産の発展について考える授業を構想した。全5時間の単元である。

社会科 年間カリキュラム ※ 色が付いている単元は、主権者意識育成の観点から、重点をおいて学習を進める単元

	前期						後期					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
3年生	夏休みの思い出 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)	わたしたちの福島市 (14)
4年生	夏休みの思い出 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)	わたしたちの福島市 (10)
5年生	夏休みの思い出 (5)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)	わたしたちの日本 (20)
6年生	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)	わたしたちの日本 (6)

指導上の工夫

- よりよい社会を主体的に構想する人々の努力に触れる活動

本小単元の中に、農林水産省の自給率担当の方を、オンラインでの講師として招聘し、食料生産の問題の解決に向けた努力について触れることができるようにした。また、これからの食料生産について議論する授業では、子どもたちの議論に参加していただき、アドバイスをもらったり、価値付けてもらったりする機会を設けた。さらに、自分たちで考えたことが国としても取り組んでいることに触れてもらうようにして、政治の働きをより身近に感じることができるようにした。

- 学習後も見つけ続けることができる教材の工夫

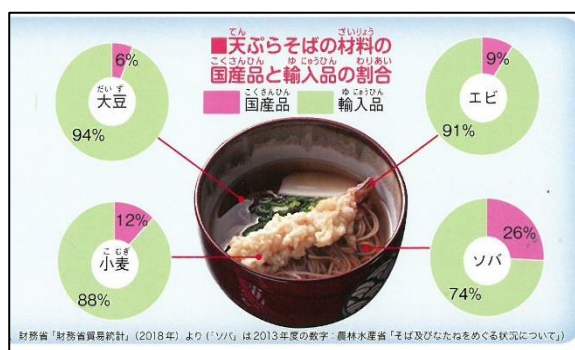
単元の導入で、一杯のそばの産地を扱った。その際、そばは日本食を代表する一つであるという資料と、そのそばの多くは外国産のものでできていることを示す資料を提示した。このことから児童は、日本食でさえ外国産のものでできている、普段口にする食料の多くは外国産のものであることに気付くとともに、これからの食料生産を考えるきっかけとなった。

海外で知られている日本食

第1位	お寿司(56.3%)
第2位	ラーメン(48.5%)
第3位	そば・うどん(43.7%)
第4位	さしみ(42.1%)
第5位	天ぷら(39.8%)

訪日外国人から見た日本の食に関する調査 農林中央金庫 https://www.nichubank.or.jp/efforts/pdf/research_2023_01.pdf

資料【海外で知られる日本食】



資料【天ぷらそばの国産品と輸入品の割合】

単元の終末において「食料自給率を上げるためにどの取組を応援しようかな」という問いを設け、我が国の食料生産と国民生活とのつながりを見いだすことができるようにした。そして、講師の方とともに議論することで、我が国の食料生産の発展について考えることができるようにした。また、答えが多様な課題だからこそ、議論をきっかけに、我が国の産業の発展を将来にわたって見つめ続けることができるようにした。



写真【考えを明確にする様子】



写真【農林水産省の方の話】

指導上の工夫

児童は単元の導入で、食料自給率が他国に比べて低い現状であることを知った。それがよいことなのか、問題があるのかについて話し合っていく中で、食料自給率を少しでも上げていきたいという思いが高まってきた。自給率を上げるための方法について、いくつかの方法を見だし、それぞれのメリット・デメリットを整理する時間を設けた。議論のテーマは「食料自給率を上げるためにどの取組を応援しようかな」と定めた。議論の授業の前時までに、これまでの学びを基に自分の考えをもつことができるようにした。



写真【庄内平野の農家さんの話】

児童が考えをもつ際には、教科書や資料集、これまでの学びを根拠としていた。自給率を上げる方法を話し合った際には、品種改良を大事にした方がよいという考えが出てきた。これは、庄内平野の農家さんが米の品種改良をして生産量を上げていることを根拠にしていた。農業の学習では庄内平野の農家さんとオンラインで対話した。品種改良について具体的に教えてもらっていたからこそ、食料自給率を上げる方法の一つとして考えることが

できたと想定される。このように情報を直接収集し、公正に判断し、自分の意見をもつことの充実を図ることができた。

児童の変容

食料自給率を上げるためにどの取組を応援するかを考えた際、抽出児は下の資料のような考えをもっていた。本時では農林水産省の自給率担当の方を講師に招いて議論をおこなった。授業での資料提示やその後の議論を通して、抽出児の考えは下の資料のように変容した。

ここからも、農林水産省の自給率担当の方とともに議論する中で、それぞれの取組のメリットとデメリットをしっかりと理解し、我が国の食料生産の発展に向けて、自分にできることを決めて関わろうとしていることが分かる。議論の前後で、我が国の食料生産の発展のためによりよい方法は何かを考え、関わろうとする態度の変容が見られた。



写真【議論の様子】

【議論前の考え】

ぼくは地産地消の取組を応援したい。理由は、地域で生産された食料を地域で消費することで、地域の生産者を応援することになるから。

【議論後の考え】

ぼくは最初、地産地消の取組が大切だと思った。すぐに取り組み、地元の食料を食べることで、地元の生産者の助けになると思ったからだ。でも、地産地消は地域で生産される食料の種類が限られていることが分かった。また、農林水産省の井坂さんからの話にあったように、パンではなく米を国民が食べていくことで、自給率を上げることができると分かった。だから、地産地消だけでなく、幅を広げて、国産の食材を食べることを応援したい。

資料【議論を通して見られた考えの変容】

他教科等との関連

本校では総合的な学習の時間に個人総合である「探究の時間」を行っている。個人で探究のテーマが違う中で「日本の食料自給率を上げるために国産のものを使ったパンやお菓子を作ろう」と考える児童や「日本の食料自給率を上げるために」という個人テーマで学習に取り組む児童がいた。社会科での学習や議論を基に、より詳しく知りたいことを明らかにし、授業で活用した資料を引用しながら、改めて自分の関わり方を考え、発信しようとする姿が見られた。



写真【国産米粉を使ったパンの調理】



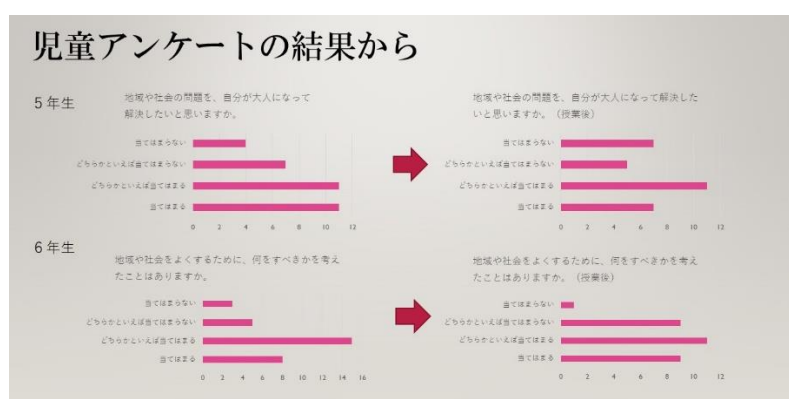
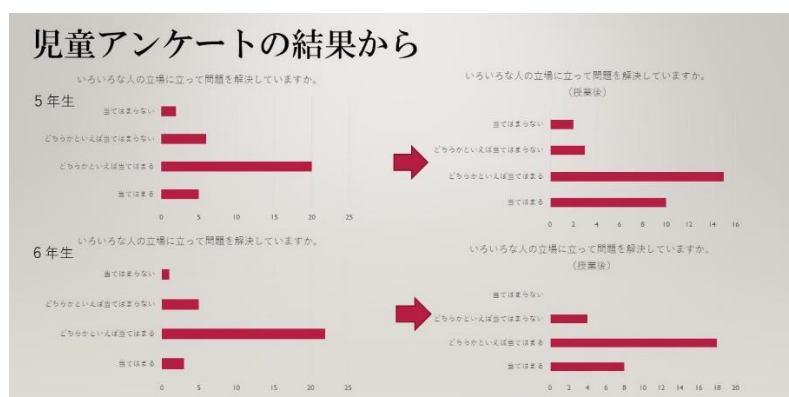
写真【日本の食料自給率の変化をまとめる様子】

児童アンケート調査から

授業前と授業後のアンケートによると、「いろいろな人の立場に立って問題を解決していますか」の項目では、6年生、5年生ともに当てはまるを回答した人数が増えた。授業の中で、各自の立場を明確に、多様な視点から議論したことがこの結果につながっていると考えられる。

また、6年生は「地域や社会をよくするために、何をすべきかを考えたことはありますか」の項目で、「当てはまる」と回答した児童は増えたが「どちらかといえば当てはまらない」と回答した児童も増え、二極化が進んでいる状況も見られた。理由については、地域や社会の問題について、単元を通してその課題をしっかりと捉えたことで、現実的な課題解決の困難さを感じた児童もいたことが考えられる。授業での選択・判断場面での議論が「地域や社会をよりよくする」ことにつながっていることをより自覚させていく必要があるとともに、地域や社会の課題について解決の難しさだけでなく、解決するよさについても触れる必要があるのではないかと考える。

「18歳になったら選挙に行きたいですか」の質問に対しても肯定的な意見が増えている。児童の具体的な理由として「自分が過ごしている地域や社会だから投票したい」「全員が投票することがみんなで考えた政治になるから」との回答があった。



資料【児童アンケートの結果】